Web版
一本道
第７号
通巻第７７号

【本誓寺講演録】

令和六年十月二十五日　報恩講より

「一瞬、一息、一声の称名念仏」（第五回）

金沢教区三上組　浄土寺住職　大窪康充　先生

昨年、二十四時間テレビをたまたま見ていました。山本栞奈さんという方が紹介されていたのです。彼女は、生まれながらにして児童養護施設で育てられました。いろんな事情があるにしても、親と一緒にいられなかったのです。その栞奈さんが、二十歳前に筋肉の難病にかかってしまったのです。あと三ヶ月もたてば声帯がこわれて声が出なくなる、そういう状態だったのですね。そんな彼女が二十四時間テレビを通して、どうしても訴えたいことがあると言うのです。それは、「親に会いたい、親と一緒に居たい」と。私はびっくりしました。どういう事情があったかわかりませんが、もしかしたら親に捨てられたのかもしれないのですよ。そんな親と一緒に居たい、親に会いたと主張されているのです。栞奈さんは、ずっと、介護のヘルパーさんや介護士さんからの愛情を一心に受けてきて育てられました。それでも、親への追慕から複雑な葛藤があったはずです。それでも親と一緒に居たいと。そして、最後に言い放った言葉が、「この世の中で誰一人、置いていかれない社会を作りたい」と言うのです。ほぼ寝たきりの状態ですよ。なかなか身動きがとれない栞奈さんです。それでも、「この世の中で誰も置いていかれない社会を作りたい」という発言に対し、それが法蔵菩薩の誓願と重なって、私は驚きをかくせませんでした。

栞奈さんは、おそらく様々な挫折や屈辱、後悔などを乗りこえてきたのだと思います。ことに親がわからないという複雑な思いとともに苦悩されてきたのだと思います。でも、栞奈さんの生き様、そして発信することばの力から、親を認めないということは、自分を認めないということ。親をないがしろにすることは、自分をないがしろにすること。親を排除することは、自分がこの社会から置いていかれることなのだ。私にはそう響いてきたのです。まさしく親を乗りこえることによって、寝たきりになりながらも自立していくすがたが、そこにあったのです。

親鸞聖人は、『歎異抄』（第十六条）で、次のように言われています。

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞

一人がためなりけり。」

すべての人々を救うために誓いをたて、阿弥陀さんの前身である法蔵菩薩は、五劫というとてつもなく永い時間をかけて思惟され願いを成就しました。それは他でもない、この私ひとりのためだった、だれよりも救われがたき私自身の問題だったのだと。私一人が救われることと、すべての人々が救われることとは一緒です。なぜならこの私一人が他のだれよりも罪深い人間だからです。こんな私が救われるのだから、他のすべての人々が救われるはずだと。そういう人間観、救済観に立った親鸞聖人なのです。だれよりもこの私自身が、倶会一処を拒絶してしまう、いわば他人を排除してしまう救われがたい存在だったのだと。他人を排除することは、自分が排除することであり、自分が社会から置いていかれることなのだと。念仏は、そういう倶会一処、どこまでも倶に救われていくことなのです。どんなに憎い人でも嫌な人でも、けんかが絶えない嫁と姑同士でも、そんなドロドロとした日常の人間関係において、相手のドロではなく私自身のドロが見えてくる。そこに相手の存在を尊重していく念仏の声とともに、基本的な人との対話が生まれ、人と出あっていけるのだと思います。

『阿弥陀経』の本文は、釈尊が舎利弗の機が熟した「その時」から始まり、「その時」で終わります。「その時」とは、舎利弗のどんな時だったのか。まさしく舎利弗自身の価値観が崩れ、自らの誤りに目覚めた「その時」であった。また阿弥陀さんの現在説法の声が聞こえてきた「その時」だった。そして『阿弥陀経』の後半、東・西・南・北・上・下の六方段のガンジス河の砂の数ほどの仏さんたちの声が聞こえてきた「その時」だったのだと思います。

自らの誤りに目覚め、他者の声が聞こえてくる「その時」とは、楽で安心できるようになったとか、困難がなくなったとか、そんな都合のいい話になっていくのではありません。むしろ、苦悩しながらも重いものを背負った「その時」だったのだと思います。たとえ苦悩し重いものを背負った「その時」であっても、そこには、新たな教えに出あい、他者の願いに応えていくことによって、無言の中にも第一歩を踏み出す「その時」の舎利弗のすがたがあったのだと思います。

『阿弥陀経』の最後は、「歓喜信受　作禮而去」（歓喜し信受して、礼を作して去っていく）で終わります。みんな説法の場である祇園精舎を離れて去っていく。どこに向かって去っていくのか。今まで世間を離れて出世間にいた舎利弗が、最後は五濁悪世の世間に帰っていったのです。五濁悪世の世間というのは、穢れた娑婆世界のことです。このドロドロとした人間関係、いろんな憎しみ、悲しみ、争い、そういう人間のさまざまな感情が渦巻く世間にこそ、本当の真実の声、念仏の声が聞こえてくるのだと。実際に舎利弗は、亡くなる前に、故郷の母親のもとへ帰っていかれました。親の反対を押し切って出家した舎利

弗だったのですが、最後は親のところへ帰っていった。でも親が亡くなる前に死んでしまった。そういう舎利弗の物語が伝わっているのです。

私たちも同様、今、本誓寺さんの法座にあわせていただく中で、新たに皆さんお一人おひとりが日常生活に帰っていかれます。お寺でお参りをして、それぞれの自立のために日常の生活に帰っていく、そして一人ひとりの物語をつくっていくことだと思います。

そろそろ最後になります。ずっと前のことですが、私は随分と落ち込んでいたことがありました。元気がでないのですよ。すると、ある時、外からことばが入ってきたのです、不思議とね。それはだれのことばかと言うと、明石家さんまでした。以前、テレビを見ていた時に、さんまと司会者の方がトーク番組でやり取りをしていたのです。司会者の方がさんまに次のように聞きました。「さんまさん、仕事なんかで落ち込んだことはないのですか？」。すると、さんまが言いました。「僕ないよ。だいたい落ち込む人っていうのは、自分のことを過大評価し過ぎなのよ」と。何か思い通りにならない時に、「こんなはずじゃなかった」、「自分はもっとできるはず」と、勝手に理想の自分を描いていたものが、ただの妄想になっていたのでしょうか。さらにさんまが言ったのです。「何やかんや言うて、今日やったこと、今日できたことがすべてやねん」と。自分が本当に落ち込んでいたとき、ふと、このようなさんまのことばが身体に入ってきて、自分のことを言い当てられた想いでした。何か理想を求めて生きていくのではない。今日一日、そして一瞬、一息、一声を生きていく念仏を、今一度、見直させてもらえた私にとっての「その時」でした。

くり返しますが、みなさんは、このお参りが終わって、本誓寺さんを出れば、また日常の生活に戻ります。ふと気づけば、また時間に流されたり、厳しい現実に対してあらがってしまったり、自分の立っている場所を見失うことがあるかと思います。でもまた、お寺に来て手を合わせたり、お内仏や日常の生活の中でお念仏を称えたり、そのくり返し、くり返しの中で、生きる方向が少しずつ定まっていくのだと思います。

「願以此功徳　平等施一切　同発菩提心　往生安楽国」（願わくは、この念仏の功徳を以って、平等に一切を施されていればこそ、ともに菩提心を発して、浄土に往生してほしい）と。

平等というのは、みんなの条件が一つになるとか、すべてが同じ色に染まるとか、そういう話ではありません。みなさんお一人おひとり、仏さんから任されている今日一日、そして一瞬一瞬があります。その一日、一瞬をどのように生きるのですか。常に変化して止まない日常の生活の中で、新たな目覚めがあり、常に教えられ、そして限りなく人と共感していける、いわゆる困難な穢土に立ち尽くしながら浄土への方向が定まっていく生

き方をしてほしいと願われているのです。愚痴ばかり言って過ごすのも今日一日です。だけど、こころから感謝の気持ちで終われる瞬間、そして今日一日があります。

浄土真宗の教えである本願他力というのは、無責任に、また投げやりになって、私が仏さんにお任せするという話ではないですよ。だれにでも平等に、今日一日、この一瞬を仏さん、そしてご先祖をはじめ亡き人々からお任せされているのです。そんな仏さんや大切な人々の願いに応えていく歩み、南無阿弥陀仏を称えていくその声の中に、歳を重ねても新たに目覚めていける世界（仏の宝）、それと同時にことばや教えに出あっていける世界（法の宝）、そして深い悲しみを通して、他人と共感していく世界（僧の宝）をいただいていく、そういう仏・法・僧の帰依三宝のお念仏。念仏を称える日暮らしを、これからも一緒に大事にしていきたいと思います。合掌。

「一瞬（ひととき）、一息（ひといき）、一声（ひとこえ）の称名念仏」

金沢教区三上組　浄土寺住職　大窪康充　先生

全五回了

講師紹介　大窪（おおくぼ）　康充（こうじゅう）

昭和四十年石川県白山市（旧松任市）生まれ。金沢教区第三上組浄土寺住職。大谷大学大学院博士後期課程満期退学。真宗大谷派擬講。金沢教区教学研究室元室長。金沢真宗学院前指導主任。著書に『念仏の音が聞こえるとき『正信偈』『歎異抄』との対話』（法藏館）、『念仏の声が宝となるとき 生活にいきる『教行信証』のことば』（法藏館）、『合利佛の物語 阿弥陀経の黙った主役』（京都月出版）など。